

明治大学平和教育登戸研究所資料館
第6回企画展記念 第一回講演会

NOBORITO 1945 —登戸研究所70年前の真実—
第一期 8月15日までの登戸研究所
本土決戦準備と登戸研究所

明治大学平和教育登戸研究所資料館長
山田 朗（文学部教授）

はじめに

- [1] 70年前＝1945年の戦争の状況を把握する。
- [2] 日本軍の〈本土決戦〉準備について把握する。
- [3] 登戸研究所における
風船爆弾作戦
移転（長野県伊那地区・北安曇地区など）
移転後の重点研究、兵器生産
について紹介する。

明治大学における戦争遺跡 生田キャンパス

明治大学生田校舎平面図(2010年11月現在)



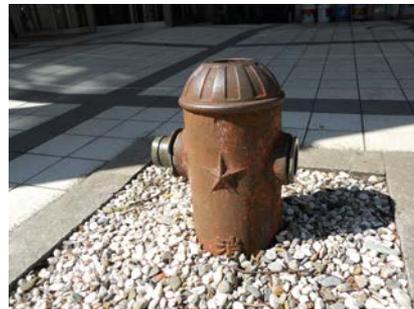
1947年 GHQ撮影 国土地理院所蔵

明治大学における戦争遺跡 生田キャンパス

陸軍登戸研究所関係の遺跡(1)



弥心神社（現・生田神社）



陸軍の星マーク
のに入った消火栓



動物慰霊碑

〈表面〉動物慰霊碑

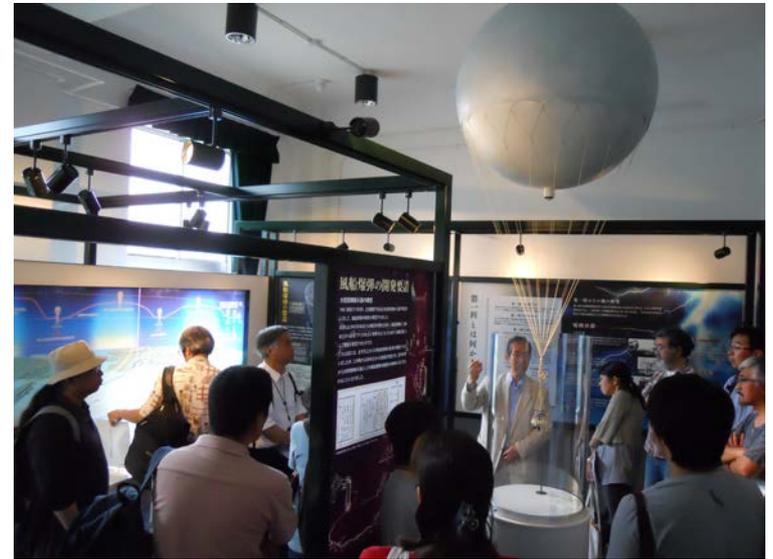
篠田鏢書

〈裏面〉昭和十八年三月

陸軍登戸研究所建之

明治大学における戦争遺跡 生田キャンパス

陸軍登戸研究所関係の遺跡(2)



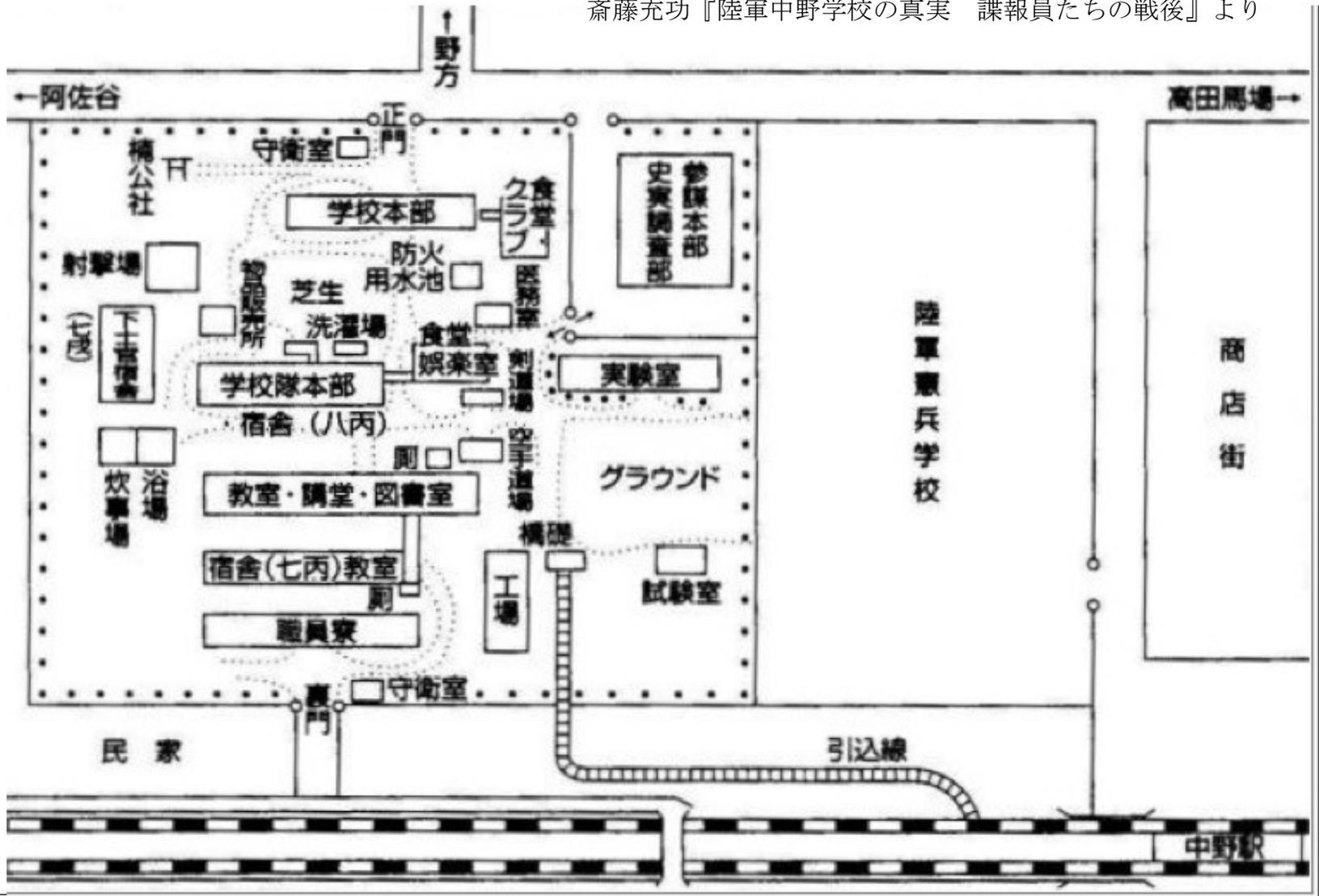
36号棟（生物兵器開発）
＝登戸研究所資料館（2010年3月開館）
水～土10時～16時開館 入場無料
上：外観、右：内部

明治大学における戦争遺跡

中野キャンパス

陸軍中野学校の跡地の一部

斎藤充功『陸軍中野学校の真実 諜報員たちの戦後』より

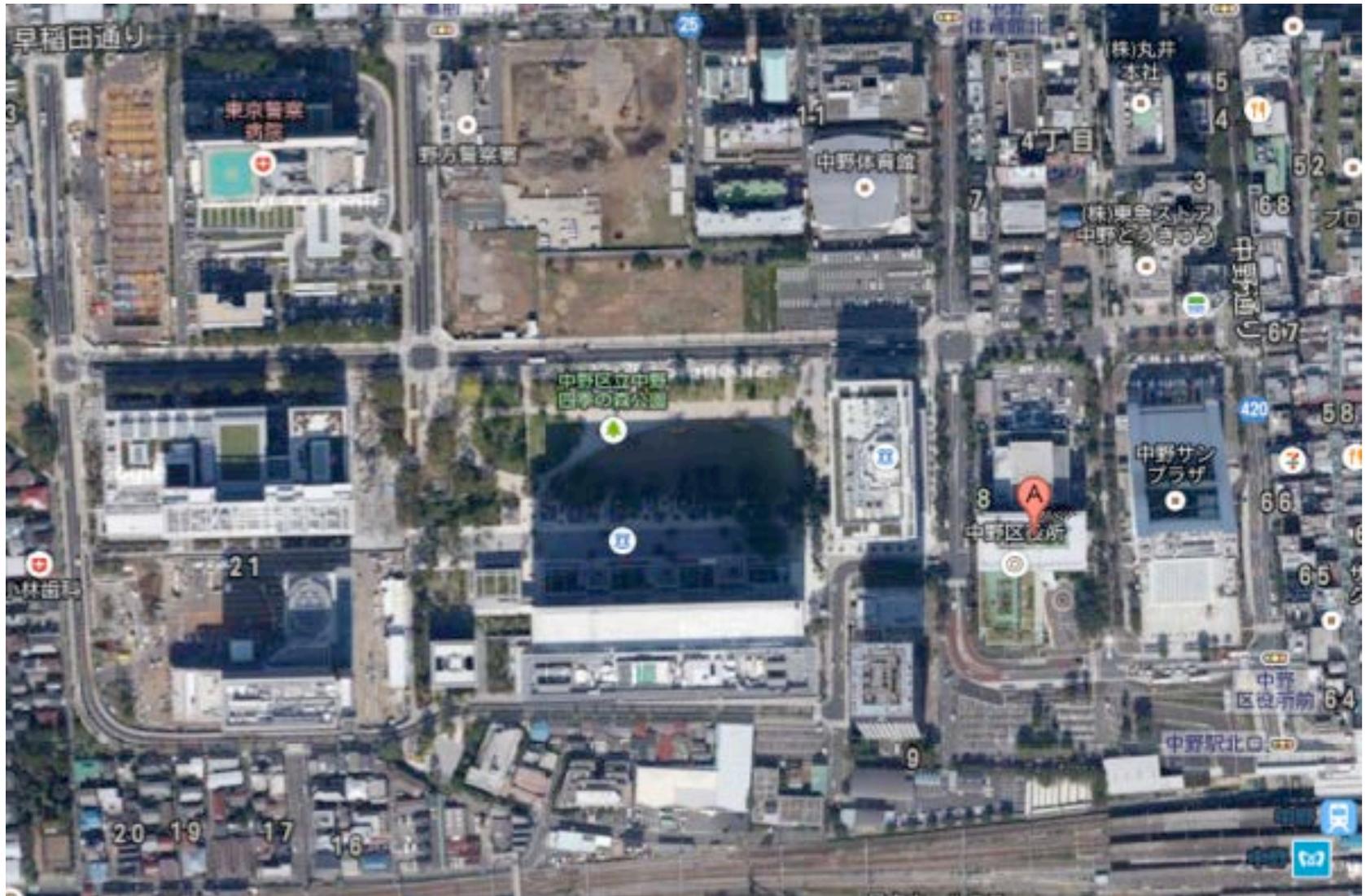


明治大学における戦争遺跡

©google map

中野キャンパス

陸軍中野学校の跡地の一部



明治大学における戦争遺跡

中野キャンパス



I 1945年（昭和20年）における戦況と〈本土決戦〉準備

1 戦況の悪化と戦力の消耗 → 【年表】

[1] 3月には米軍がフィリピンの、英軍がビルマの重要地点をほぼ制圧

3月には東京など主要都市が大規模な空襲を受け、壊滅状態に

3月末から沖縄戦が始まり、4月～5月には沖縄近海で特攻作戦がピークに

[2] 小磯内閣から鈴木貫太郎内閣に（4月）

[3] 5月にはドイツ降伏、沖縄戦の戦況悪化

→ 天皇も無条件降伏やむなしとの気持ちに

2 本土決戦準備の本格化

[1] 「レイテ決戦」断念後、本土決戦準備は本格化
「帝国陸海軍作戦計画大綱」 (1945. 1. 20)

「皇土特二本土及朝鮮ノ作戦準備」を「本年初秋迄二概成ス」と決定

[2] 本土決戦作戦計画の策定

大本営陸軍部「国土築城実施要綱」発令 (3. 16)

1945. 7までの全陣地の骨格完成、1945. 10 までの完成を命ずる

大本営陸軍部「決号作戦準備要綱」発令 (4. 8)

[3] 〈本土決戦〉のための兵力総動員

敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に294万の兵力を展開

- 新たに150万人を徴集・召集して部隊を編成
(装備劣悪・練度も低い)
- 内陸防御作戦から次第に水際防御作戦へと逆戻り (第1線部隊は水際で「玉砕」想定)
- 総司令部 (大本営) のみ松代へ後退

[4] 〈本土決戦〉の労働力・補助兵力総動員
義勇兵役法の公布（6.23）：
国民義勇隊・国民義勇戦闘隊の組織
→ 〈本土決戦〉のための労働力兼補助戦力

3 〈本土決戦〉準備の実態

[1] 特攻兵器の生産と出撃基地（沿岸部）の建設

→ 「震洋」「回天」「伏龍」など

[2] 作戦用道路・飛行場の建設

→ 関東地区「リ号演習」

[3] 沿岸部での陣地構築

[4] 軍司令部機能・軍需工場の内陸部移転

→ 特に長野県・群馬県

陸軍登戸研究所などの「秘密戦」研究部門、中野学校など「秘密戦」実施部門も

Ⅱ 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

1 〈秘密戦〉とは何か

- [1] 戦争には必ず付随するが、歴史に記録されない
〈裏側の戦争〉
- [2] 戦時に限らず、平時においても密かに行われている
〈水面下の戦争〉
- [3] 〈秘密戦〉の4つ要素：
防諜・諜報・謀略・宣伝（戦時プロパガンダ）
（これらのうち防諜・諜報・宣伝は〈情報戦〉とく
くすることもできる）

I 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

2 陸軍登戸研究所：

陸軍における〈秘密戦〉兵器・資材の専門開発機関

1927年：陸軍科学研究所秘密戦資材研究室（篠田研究室）

1937年：陸軍科学研究所登戸実験場（電波兵器研究）

1939年9月：陸軍科学研究所登戸出張所

（電波兵器と「特殊科学材料」研究）

第一科（電波兵器）、第二科（毒物・薬物・生物化学兵器・スパイ用品）、第三科（偽札）が増設

1942年10月：第九陸軍技術研究所

（第一科で風船爆弾研究・開発）

1945年5月：本土決戦にそなえ長野県伊那地方等に移転

I 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

3 陸軍中野学校：

日本陸軍における〈秘密戦〉要員の専門育成機関

1938年1月：後方勤務要員養成所

（第1期生19名採用、九段・愛国婦人会別館）

1939年4月：中野の旧電信隊跡（現・JR中野駅北側）に

1940年8月：陸軍中野学校と改称

1944年8月：静岡県磐田郡に二俣分校設置

1945年4月：本土決戦にそなえ群馬県富岡町に移転

1938～1945年：

2,131名が卒業（戦死289名・不明376名）



『秘密戦関係』

防諜教育に用いられた憲兵学校のテキスト。
秘密インキの解説、他国諜報機構の概説など、
憲兵教育の様々な資料を綴ったもの。

防大大学 蔵書

『細菌学雑誌』

北里研究所の関係者を中心とした論文集。
狂犬病、チフス菌などに関する論文が収められて
います。表紙に登戸研究所の蔵書印があることから、
所員の情報収集源であったことがうかがえます。

北下登紀江 蔵書

登戸研究所資料館 【第三展示室】

Ⅲ 〈本土決戦〉準備と登戸研究所

1 沖縄における〈秘密戦〉

〔1〕 第32軍（沖縄守備軍）新設

（1944年3月22日）と急激な増強（7月～9月）

〔2〕 沖縄本島

2個（当初は3個）師団＋1個混成旅団を配置

→ 第62師団・第24師団・独立混成第44旅団

（第9師団はレイテ決戦に呼応して転出）

独混44旅団の第2歩兵隊（宇土武彦大佐）

＝「国頭支隊」

沖縄本島北部の国頭地区で〈秘密戦〉・遊撃戦を担当
米軍上陸後、遊撃戦を展開

→ 防諜作戦として一般住民をも殺傷
（大宜味村渡野喜屋）

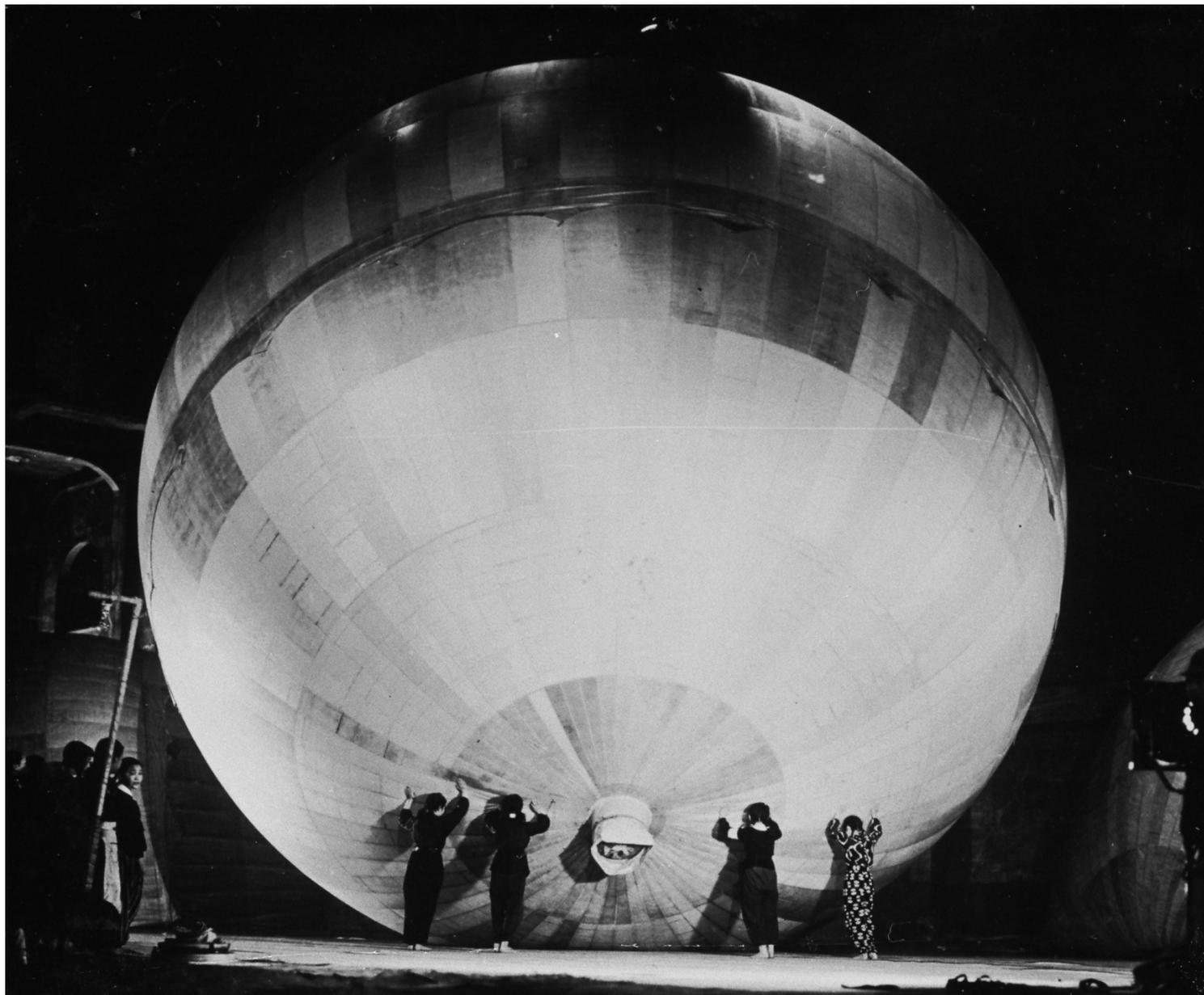
〔3〕 例外的に決戦準備が進展した部門

「松代大本営」 建設工事

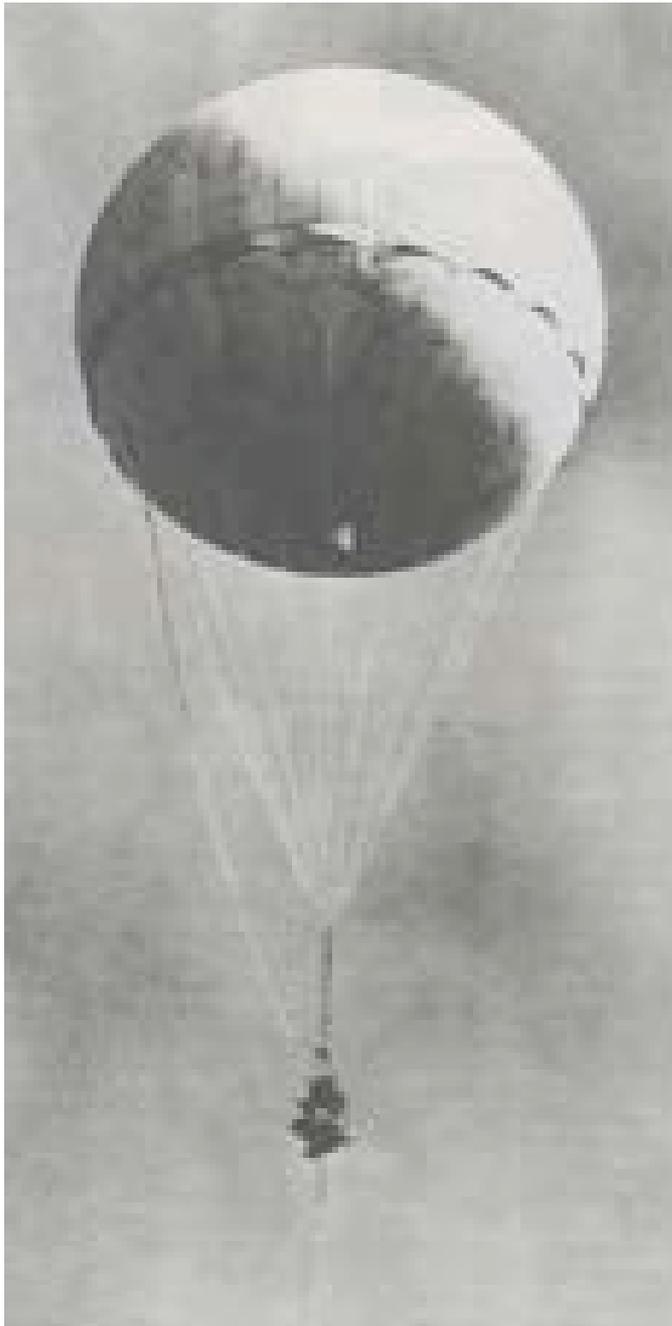
「風船爆弾」の開発と実戦投入

（当初は生物兵器＝牛疫ウィルス搭載を予定）

→ ただし、「風船爆弾」は〈決戦兵器〉ではなく、
後方攪乱のための〈謀略兵器〉



風船爆弾満球テストの様子（林えいだい氏提供：小倉造兵廠）



- **ふ号兵器**（風船爆弾）：
気球そのものを兵器化
（観測・阻塞目的ではなく）した特異な事例。
- 米国への**謀略兵器**として
開発（米本土の攪乱をね
らう、初めての大陸間横
断兵器）
- ただし、季節限定、ピン
ポイント攻撃不可能

写真 Robert C. Mikesh 'Japan's World War II
Balloon Bomb attacks on North America' より

「風船爆弾」の実戦投入

1944年11月	700個	(計画 500個)
1944年12月	1200個	(計画3000個)
1945年1月	2000個	(計画4500個)
1945年2月	2500個	(計画4500個)
1945年3月	2500個	(計画2000個)
1945年4月	400個	
合計	9300個	(計画15000個)

【補足】アメリカ側の対応・反応

〔1〕 気球の捕獲

→ 構造を解明

→ 最終的には放球基地も「バラストの砂」からつきとめる。

〔2〕 日本軍の生物化学兵器使用を警戒

〔3〕 報道管制によってパニックを防止

→ ただし、オレゴン州で死者6名（5月）

※ 『朝日新聞』 1945年2月18日の記事

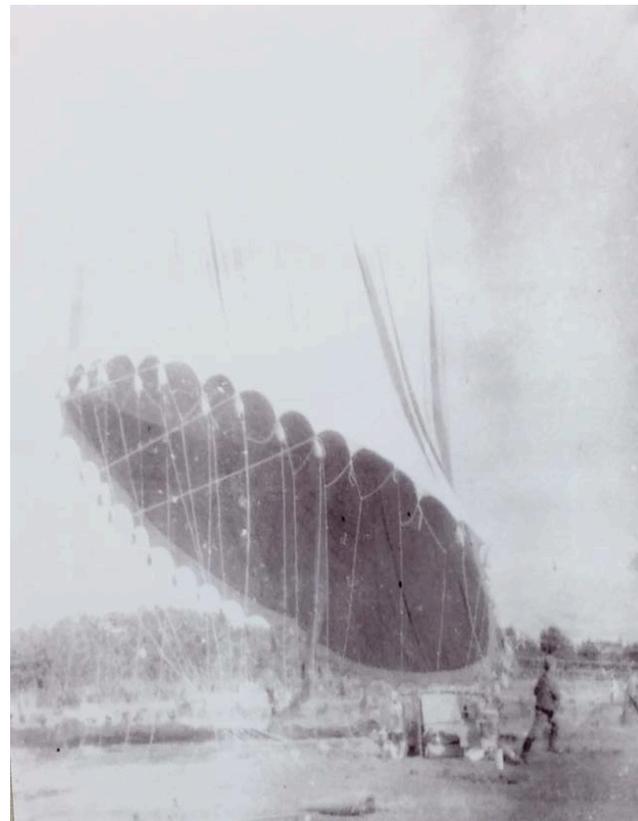
→ 死傷者500名（誤報）

→ 【企画展で展示】

【補足】 新型風船爆弾の開発 → 【企画展で展示】

夏季にも使用可能な15m気球の開発

→ 1945年2月頃に試作



2 決戦準備と〈秘密戦〉関係諸機関の疎開・移転

〔1〕 登戸研究所の疎開（1944年末～1945年5月）

電波兵器（レーダー）関係

→ 多摩陸軍技術研究所（多摩研）に統合

本部・第二科・第四科

→ 長野県の伊那郡（現・駒ヶ根市）

第一科（電波兵器） → 【企画展で展示】

→ 長野県北安曇郡・兵庫県（関西分廠）

第三科（偽札）

→ 福井県武生（和紙製造）、印刷工場は登戸に残る

〔2〕 陸軍中野学校

教育の重点を遊撃戦研究に（1943年8月～）

静岡県二俣町（現・天竜市）に二俣分教場
（分校）を開設、遊撃戦幹部の養成

（1944年8月～）

本部も群馬県富岡に疎開（1945年3月）

Ⅱ 本土決戦と〈秘密戦〉

3 本土での〈秘密戦〉の準備

〔1〕 遊撃戦の準備：『遊撃戦戦闘教令（案）』の作成

→ 敵中潜入・奇襲・陽動・謀略工作・後方攪乱などを主たる目的

薬物・細菌・時限爆弾（焼夷弾）などの使用

→ 1944. 12 天竜川下流の河川敷で毒ガスの雨下実験（飛行機から行軍する一個小隊にイペリットガスを散布）

〔2〕 登戸研究所における遊撃戦準備

第二科・第四科では、遊撃戦用の簡便な携帯兵器の開発・製造

→ 末期における重点開発課題：→ **【企画展で展示】**

◎**研う**：何にでも充填できる粘土状の爆薬

◎**焼夷剤**：伊那地区（特に中沢地区）において生産

◎**マルケ（ね号）**：熱線（赤外線）誘導式の爆弾

◎**く号**：怪力光線・怪力電波

◎**細菌兵器**

大量の**石井式濾過器濾過筒**を伊那地区に搬入

→ 細菌戦の準備か

中沢工場に残されていた
放火用謀略兵器と思われるもの → 【企画展で展示】



〔3〕 登戸研究所（研究開発）と中野学校（人材養成）の融合

→ 本土決戦に際しては、〈秘密戦〉関係機関は、地理的にも接近し、開発・製造・実戦が融合する体制になりつつあった。

登戸研究所が北安曇・伊那、中野学校が二俣・富岡

→ いずれも松代を防衛する重要拠点



石井式濾水機濾過筒
(伴幸雄氏寄贈)

登戸研究所資料館
【第五展示室】

石井式濾水機濾過筒（接写）



山田朗 撮影

おわりに

- [1] 戦争・〈秘密戦〉の記憶を残す重要性
戦争体験者の減少
→ 意識的・組織的に残さないと消滅

- [2] 決して「幻」ではなかった〈本土決戦〉

- [3] 明治大学中野・生田キャンパスで戦争を語り継ぐ意義
→ 戦争と技術、戦争と人材
→ 〈秘密戦〉から戦争の本質を考える

明治大学平和教育登戸研究所資料館



登戸研究所資料館
水～土10時～16時開館 入場無料
生田キャンパス西南門そば

上：外観、右：内部

明治大学平和教育登戸研究所資料館 第6回企画展

NOBORITO 1945

— 登戸研究所 70年前の真実 —

<第一期>

2015 **8/5** 水 >>

<第二期>

2015 **11/18** 水 > 2014 **3/26** 土 ※第一期展示は会期終了まで併せてご覧いただけます。

【開館時間】10:00～16:00 【休館日】日曜・火曜、2015年8月12日、12月25日～2016年1月6日、1月16日、2月5日 【入館料】無料

明治大学平和教育登戸研究所資料館

The dsJunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum for Education in Peace

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区美田1-1-1 新登戸学生団舎e2×3×4内 TEL/FAX044-934-7991

http://www.mei.ac.jp/noborito/ facebook.com/NoboritoZshryakuken Twitter://twitter.com/mei_noborito

QRコード



Twitter



企画展にて特別展示



【主要参考文献】

- [1] 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）
- [2] 海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発—』（青木書店、2003年）
- [3] 山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）
- [4] 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）
- [5] 山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）